

< もくじ >	
1. 2019年度定時総会・第18回大会終了の報告	1
2. 研究会からのお知らせ	1
3. 各研究会の概要報告	2~4

1. 2019年度定時総会・第18回大会終了の報告

去る6月15日(土)駒澤大学で開催された2019年度定時総会・第18回大会は、無事終了いたしました。定時総会では全ての議案が承認され、いよいよ2019年度の活動が本格的に始動します。今年から始まる第4期3か年計画におけるテーマは、「新たな時代への挑戦～エイジフリー社会の課題と展望」であり、1年目の大会テーマは、「新しい時代における地域コミュニティのSDGs」とすることが承認されました。

大会は、福島からの避難者へのインタビューを重ねている板倉真琴監督のドキュメンタリー映画『ひとと原発』の上映、新・研究会「社会情報研究会」の紹介、そしてSDGsをシニア社会に焦点を当てたテーマで行われた笹谷秀光講師の基調講演、それに続くシンポジウムは、3名の会員の日頃のユニークな活動を紹介した上で、その活動をSDGsの窓を通して見直すというもので、大変内容の濃い形で行われました。

それでも、SDGsの思想の一つは、「誰一人取り残さない」であることを考えると、「前半のドキュメンタリー『ひとと原発』に描かれた福島の避難者のことを抜きにこのテーマの議論を終わらせるわけにはいかない」という、濱口副会長の最後の挨拶の言葉は会場に重く響きました。

なお、詳細に関しては、次号で報告いたします。



2. 研究会からのお知らせ

(1) 第67回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年6月20日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) 報告者：大下 勝巳(濱口研究会フェロー)
- 4) テーマ：「死と連れだって生きる」
- 5) 参加費：300円

※ お問い合わせは、島村 (ken-sima1941@jcom.home.ne.jp) までお願いいたします。

(2) 第13回 「ライフプロデュース」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年6月26日(水) 18:00~21:00
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9F ラウンジ
- 3) テーマ：「地域コミュニティで役立つ自分になるヒント！」
- 4) 参加費：500円

※ お問い合わせは中村 (nakamura@jaas.jp) までお願いいたします。

(3) 第57回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年6月26日(水) 18:00~20:00
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館5階第5会議室
- 3) 報告者：石倉義博(早稲田大学理工学術院創造理工学部教授)
- 4) テーマ：津波被災からの生活再建過程：釜石市A地区住民の8年間
- 5) 参加費：当分の間頂戴しません。

※ 問い合わせは、福原 (fukuhara@jaas.jp) までお願いいたします。

(4) 第58回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年7月30日(水) 18:00~20:00
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館6階第7会議室
- 3) 報告者：池田恵子(静岡大学教育学部教授)
浅野幸子(減災と男女共同参画研修推進センター共同代表)
- 4) テーマ：ジェンダー視点からみた災害被災地の課題(仮)
- 5) 参加費：当分の間頂戴しません。

※ 問い合わせは、福原 (fukuhara@jaas.jp) までお願いいたします。

3. 各研究会の概要報告

(1) 第119回「社会保障」研究会報告要旨

- 1) 日 時：2019年5月22日(水) 18:00~20:00
- 2) 報告者：谷口 優(国立環境研究所環境リスク・健康センター 主任研究員、東京都健康長寿医療センター 協力研究員)
- 3) テーマ：「認知症予防のABC～方法からターゲットまで」
- 4) 会 場：日本労働者協同組合連合会 会議室

東池袋1-44-3 池袋ISPタマビル 8階

日本人の平均寿命と健康寿命のギャップは男性9.3年、女性12.6年。要介護の原因のトップは認知症であり、軽度の者まで含めると認知症の人の数は小学生全体の数を上回る。MCI(軽度認知障害)は医療介護などの社会保障費が高い。認知機能の領域は、記憶、言語、視空間認知(知覚)、注意・実行機能、思考(社会的認知)であり、認知症ではこれらの機能が失われる。認知機能が低下すると生活の自立が阻害される。認知機能の低下を防ぐ3つの柱は、体力、栄養、社会参加である。

体力というと筋肉量を増やすことと捉えられがちだが、重要なのは身体機能である。体力の要素は、筋力、平衡性、歩行である。歩行速度は、歩幅と歩調から成るが、歩幅が重要であり、歩幅の狭い人ほど認知機能低下発生のリスクが高い。言い換えれば、歩幅の狭い人は、脳梗塞などによる脳のダメージが疑われる。

血清アルブミン値、HDL コレステロール値、赤血球数の低い人ほど認知機能低下のリスクが高く、いろいろな食品を食べることが勧められる。「さ(かな)、あ(ぶら)、に(く)、ぎ(ゆうにゆう)、や(さい)、か(いそう)、(に)、い(も)、た(まご)、だ(いず)、く(だもの)」、つまり「さあにぎやか(に)いただく」と覚えるとよい。日本人は、もっと油を摂取してよい。酒については、20gまでは認知症のリスクを下げるが、過ぎるとリスクが高まる。赤ワインを200cc飲むと認知症予防になる。

閉じこもりは、老化を促進し、要介護や認知症につながりやすい。外出頻度が少ないほど歩行障害や認知症の発生リスクが高い。また、社会的接触が少ない人ほど認知症発生リスクが高い。老化防止のために、①毎日一回は外出しよう ②家庭での役割をもとう ③地域参加・社会参加

の場をもとう。

非常に身近なテーマであり、参加者からはたくさんの質問や意見が出された。老化を防ぎ、できるだけ自立した生活を続けるためには、多様な食品を食べ、外出を増やして人と会い、大股で歩くことがお勧めです。(袖井孝子 記)

(2) 第66回「シニア社会のリテラシー」研究会の報告

1) 日 時：2019年5月23日(木) 15:00~18:00

2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室

3) 報告者：佐藤 敬(濱口研究会フェロー)

4) テーマ：「横丁のご隠居(あるいは、クソジジイ)への道~私の『老いる権利』を考える~」

佐藤さんは、予ねて「横丁のご隠居」が自身の生きかたの願望であると言われていたが、今回は何故「横丁のご隠居」が望ましいのかを明快に解きあかされた。まず、「老い」を直視しようとし、いまの時代潮流への疑問を投げ掛けられ、手始めに時代小説を読むことにより、江戸時代のご隠居さん探しを始めた。そして「横丁のご隠居」とはどのような人物なのかを探り、結びとして、老人の知恵や技術や気質が孫の世代へと伝えられる時にこそ、サブカルチャーとしての老人文化の豊饒性が発現するのだ。そこに現代版「横丁のご隠居」の居場所もあるのではないだろうか。「俺は隠居だ、クソジジイだ。文句あっか！」こう胸を張って叫ぶことのできる年寄りになりたいと切に願うところである。と述べられた。

濱口座長はコメントとして、いまは「老い」の価値を見いだすプロセスにあり、「老い」を卑しめるのではなく、再評価する段階にある。「おもてなし」の様に、「いんきょ」という考え方は働き方と生き方をつなぐそのユニークさが注目を引き、国際的なことばになるかもしれない。「いんきょ」が受け入れられるのは、日本の円熟度、バロメーターになると思う。長生きが当たり前になった時代環境下でこそ「いんきょ」の再評価が考えられると結ばれた。

(島村記)

(3) 第54回「災害と地域社会」研究会の報告

1) 日 時：2019年5月28日(火) 18:00~20:00

2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館6階第7会議室

3) 報告者：浦野 正樹(早稲田大学文学学術院教授/地域社会と危機管理研究所代表)

4) テーマ：「大規模災害からの復興の地域的最適解に関する総合的研究」をめぐって

~研究趣旨とその背景~

5) 報告概要

今回は、浦野正樹教授に、2019年度から2023年度に及ぶ科研費プロジェクト「大規模災害からの復興の地域的最適解に関する総合的研究」の趣旨と概要についてご報告いただいた。本研究は2011年3月11日に発生した東日本大震災以来7年間に蓄積されてきた復興に関する社会的調査研究の成果に基づいて、災害復興の地域的最適解を明らかにするとともに、その最適解の科学的解明に基づいて、次に予想される大規模災害に備えて政策提言を行うことを目的とするものである。参加者には、全国の大学にまたがる代表的研究者が名を連ねており、本研究会もその研究報告会の場の一つとして活用していただくことになった。

東日本大震災は、9県227市町村に及び①広域性、②被害の甚大性、③複合性という特性を持つ大規模震災であることから、被災地の被害状況に多様性が見られる。復興過程にも、復興計画の策定、住民の合意形成、復興への評価に大きな違いがみられ、それらの過程を総括することが喫緊の課題である。そして、本プロジェクトの主要課題として、(1)多様な被災地域を分析単位としてどのようにカテゴリー化するか、(2)地震、津波、原発などの災害因によって異なる復興過程の時間をどのようにとらえるのか、(3)災害復興の『最適解』とは何を意味するのかという3つの論点を提示された。地域のカテゴリーについては、リアス式海岸か平地、市街地か農漁村、原発事故避難元と避難先などの軸が分類軸として議論され、それぞれの地域での復興には、時間の経過にも大きな違いが出ること、そして、それぞれの地域での復興過程の多様

性が多く、社会学的調査の結果から解明されたとし、復興の過程は一律ではなく、今後予想される南海トラフ地震や南関東地震における災害復興についても、それぞれの地域の事情に応じた最適解が議論されるべきであるとまとめられた。

報告後、焦点となる地域復興の「最適解」という概念あるいはイメージについて意見交換が行われた。最適解とは誰にとっての最適解なのか、復興がトップダウンで進むか、ボトムアップで進むかという見方が一つの例として示されたが、両者はまったく異なる仕組みと構造をもつ過程であることをわきまえた議論が必要であること、また、復興過程のどの時点で最適解を問うのか、また、どの程度のタイムスパンで最適解を考えるのか、日本のように災害のリスクと共に生きる国以外の国においては、地域自身の移転を考えるとところもあるなど、多くの意見が出された。今回は、それぞれの研究者が、どのような論点について議論を詰めたらいのかについてのプレインストーミングの機会になったように思われる。(長田記)

(4) 第12回 「ライフプロデュース」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年5月29日 (水) 18:00~21:00
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9F ラウンジ
- 3) テーマ：「令和の時代、身近な地域コミュニティのSDGs」

今回は、6月15日(土)に駒沢大学で開催されるシニア社会学会の大会で、研究会のメンバー3名(小平、中村、庄司)がシンポジウムのパネリストとして選出され、登壇することになりました。そのため今回は、その当事者と皆川の4名で、準備・打ち合わせも兼ねた月例会となった次第です。

今年の大会テーマは「新しい時代におけるコミュニティのSDGs」。ちなみに、SDGsとは、2015年9月に国連で開かれたサミットの中で決められた、「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称で、国際社会共通の目標となっています。

大会の基調講演者である笹谷秀光氏(社会情報大学院大学客員教授)の演題「まちづくりにおける共通価値の創造とSDGs」を巡るパネリストを務める3名独自のテーマは明快で、以下のような活動を主眼としております。

小平陽一氏は「首都圏郊外の遊休の畑を活用しての野菜栽培と、収穫した野菜を都内の子ども食堂に提供する活動」

中村昌子さんは「自分が身近な地域コミュニティで実現したいSDGs」の演題で、「～SDGsという『窓』を通すと世界共通の課題へ繋がっていく。ワクワク感で小さな一歩を踏み出すことが大切！」

庄司信明氏は「福島で進むオーガニックコットンプロジェクト」

以上のようなテーマで3人3様、活動に至った目的や背景を簡略に紹介し、それぞれの地域コミュニティでの課題や展望などについても説明できればいいのかなーそんな雰囲気全員が合意に達した次第です。

「SDGs」という世界共通の話題に絡めて、「ライフプロデュース」研究会員がパネリストとして自らの実践活動を披露するディスカッションに関心がある方々には、是非とも6月15日(土)に駒沢大学で開催されるシニア社会学会にご出席願います。(皆川 記)

一般社団法人シニア社会学会・事務局(月・水・金オープン)
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-27-4 ナカヤビル202
電話&FAX:(03)5778-4728
eメール:jaas@circus.ocn.ne.jp URL: http://www.jaas.jp/